

まえがき

この本を手にとってくださってありがとうございます。

英語を教え・学ぶことは、あなたにとって
喜びでしょうか、
それとも苦役でしょうか？

それが、この本のテーマです。もしあなたにとって、英語を教え・学ぶことが喜びだとしたら、あなたはきっとこの本にさらに多くの希望を見つけるでしょう。もしも今あなたにとって、英語を教え・学ぶことが重荷や不毛でしかないのならば、あなたにぜひこの本を読んでいただきたいと思います。

この本は、より楽しく豊かに英語を教え・学ぶ方法についての本です。ご承知のように、英語の教え方の本は毎年たくさん出版されています。でもこの本は、それらとはちょっと違うものです。この本は英語を効果的に教えることはもちろん、それと同時に学習者の人間的成長をはぐくむ授業を提言しています。

「英語の授業は英語力養成に集中していればいい、人間的成長なんて余計な脱線だ」、という見方もあります。でも、私たちは英語力養成と人間的成長が両立するものだと考えます。むしろ英語の授業は、人間的成長という要素を持つことで、より効果が促進されると考えます。

日本の学習者・学生は、学校で英語学習にどれだけの時間を費やしているのでしょうか？ ざっと計算してみますと、授業だけでも小学校5、6年で通算約105時間¹、中学校1～3年で約350時間²、高校では学校によってバラ付きがありますが、全日制普通科文系で3カ年を通じておよそ510時間³の英語授業を受けています。合計すると約965時間にのぼります。これに、宿題や予習・復習、さらに人によっては塾通いといった学習が加わります。10～18歳という時期は一生の中で最も知性が発達し、情緒が豊かな時期です。その時期にこれだけの時間をかけて英語を学習しているのに、もしもその学習が人間的成長と関連づけられていないとしたらどうでしょう？ 学習者にとって貴重な成長の機会の損失、国家的にも国民の知性・感性の損失になることでしょう。

一つのたとえ話でお話ししましょう。今あなたは、2つの食事メニューのどちらかを選ぼうとしています。一つは、完全サプリメントコースです。調理や食事にかかる時間や労力を省くために、必要な栄養素を全部凝縮した錠剤を飲むのです。摂取に要する時間は10秒足らずで、ほとんど便にもならないので大変効率的です。もう一方は、従来のような食事コースです。前菜・スープ・サラダ・主菜・副菜・

ライス・デザート・飲み物を1時間ほどかけて食べます。あなたなら、どちらのコースを選びますか？

ほとんどの人が、従来の食事コースを選ぶことでしょう。それは何故でしょうか？ 主な理由は、「食事は人生の大きな喜びの一つ」だからでしょう。食事は口と目と鼻で味わう喜びであり、また人々との大切な交流の場です。いくら効率的だからといって、こういう喜びを省略してサプリメントを選ぶ人は少ないでしょう。

同じことが、英語の学習にも当てはまると思います。単語・文法・語法・発音・段落構成・スピーチ・プレゼンテーション・ディベート・エッセイライティング技法等々、英語の学習で学ぶことはたくさんあります。その知識・技術だけをどれほど詰め込んでも、それが英語を味わい、人と関わりながら学ぶ喜びを伴わなければ、英語力は定着しません。母語と言語的に隔たりが大きい英語を習得するためには、自分で自分の学習を管理する長い持続的な忍耐・努力が必要です。もし学ぶことが大きな意味と楽しさを伴うならば、人はこの忍耐・努力を持続できるでしょう。では、そういう英語を学ぶことの楽しさとは、具体的にどこから得られるのでしょうか？

学ぶ楽しさとは、学ぶ内容が自分にとって意義を持っていると感じた場合に生まれるものです。「今学んでいることは、自分自身を高めてくれる」「これを学ぶことは、将来自分がより良く生きることにつながる」と感じられれば、人は積極的に学ぼうとします。また、学ぶ楽しさとは、その学習のプロセス（過程）が自分にとって楽しく・有意義である時に感じるものです。自分たちが主体となって活動し、友だちとふれあい、教えあい、協力して不可能を可能にし、課題を成し遂げていくプロセスが、学ぶ充実感を生むのです。

人間形成的な授業では、英語活動を通して学習者が自分や友だちの良いところを見出し、言葉を交わす楽しさやマナーを、やり取りの中で体得し、物事に対して自分の意見を持ちそれを表明し、自分と異なる意見にも耳を傾け、自己肯定感や寛容性を身につけます。聞いたり読んだりした英文をもとにして、自分たちの価値観や人生目標を考えます。また、聞いたり読んだりした英文を鵜呑みにするのではなく、建設的・批判的に吟味する知性を身につけます。さらに自分たちが遭遇しそうなトラブル場面を想定し、仲間と知恵を出し合ってその解決策を考え、それを適切なロジックや英語表現を用いて発表し、それを通じて対人交渉力や成功体験を積み重ねていきます。

そんな意味深い学びと、豊かな学習プロセスのある英語授業をつくりたい、この本はそれを志向する28人の英語教員（小・中・高校・大学・専門学校・民間英語教室）が集まって4年がかりで書き上げました。私たちは、学習者の「英語が使えるようになりたい」という願いを叶えることを、何よりも大切にしています。その願いを大切にすることこそ、楽しく意味ある筋道（プロセス）で教え・学ぶことを

重視しています。その意味あるプロセスを具体的に提案するのが、この本の目的です。この本に書かれたアイデアはすべて、日本の学校の教室で実際に用いて効果が証明されているものです。

第1章では、心に触れる授業と、そうでない授業のちがいを具体例で紹介しします。英語を習得するには、長い持続的な学習が必要です。その長い道のりのエネルギーとなるのは、自分が生きることと関連づけられた、心に触れる学習方法です。私たちはともすれば、試験で高得点を取ることだけに目を奪われがちですが、それだけでは心のエネルギーが枯れてしまいます。この章では、生きることと関連づけられた、心に触れる授業と、そうでない授業の違いを、具体例や人生体験で紹介しします。

第2章では、どのようにすれば心に触れる授業が実現できるのか、そのメソッド(方法論)をわかりやすく解説しします。ポイントとなる理論は、自己実現欲求・有意味学習・外発的動機づけと内発的動機づけ・自己関与性・自己効力感・自己肯定感、批判的思考力です。そのメカニズムを理解することが、心に触れる授業の原点になります。それらの理論を授業に具現化する方法を、わかりやすく解説ししています。たとえば言うならば、授業という建造物の躯体部分(柱や梁)です。

第3章では、9人の教師が英語教師としての成長体験——本当の授業に目覚めることとなったシンボリックな授業体験——を語ります。お読みいただければわかりませんが、どの教師も最初から人間形成的な信念や展望を持って授業を行っていたわけではありません。むしろ迷いながら手探りで生徒と関わる中で、英語を通したより深い人的交流の泉を掘り当てる体験に出会い、開眼したのです。

第4章では、15人の教師が、「これこそが私の理想を体現した授業だ」と言える、小・中・高校・大学・専門学校・民間英語教室での授業の取り組みを描写しします。具体的な人間形成的授業目標をかかげ(たとえば「安心して自分を語る」)、その目標実現に向けた授業展開を示しします。この第4章は逸話風に語られています。それには理由があります。逸話は、さまざまな教訓が埋め込まれた、一つの有機体です。人は逸話から、自分に即してそれぞれ異なる教訓を引き出すことができます。その意味で、逸話は理論書に勝るものがあります。たとえば私達が自信喪失のどん底にある時、達人のアドバイスはかえって自信を失わせることがあります。逸話の主人公が授業でつまずき、もがきながら道を見出していく姿に、人は救いや励ましを得るものです。

以上のようにこの本は、学習者の「英語が使えるようになりたい」という願いと、「学習者が英語を使えるようになるのを支援したい」という教師の思いを叶えようと集まった、28人の英語教員による、学びについてのアドバイスと体験集です。私たちは、学習者の「英語が使えるようになりたい」という願いを叶えることを、何よりも大切にしています。その願いを大切にすることこそ、楽しく意味ある内容・方法・過程で教える・学ぶことを重視しています。それを具体的にお伝えしようとす

るのが、この本の目的です。この中に、あなたがお探しの閃きやアイデアや励ましが、見つかりますよう期待いたします。英語教育を通して自他ともに成長していくことに、大きな喜びを感じつつ。

2024年5月

編集代表・三浦 孝
(ヒューマンステイック英語教育研究会会長)

¹ 小学校5, 6年では、45分間の授業を週1回、年間35週実施したものを「1授業時間数」と呼ぶ。小学校では英語が週2回実施されているので、2カ年の合計授業時間数は2回×35回×2年で、140授業時間数となる。これを、実際の時間の長さすなわち60分に換算すると、 $[140 \div 60 \times 45]$ で、105時間となる。

² 中学校では50分間の授業を週1回、年間35週実施したものを「1授業時間数」と呼ぶ。中学校では英語が週4回実施されているので、3カ年間の合計時間授業数は4回×35週×3年で、420時間授業数となる。これを、実際の時間の長さすなわち60分に換算すると、 $[420 \div 60 \times 50]$ で、350時間となる。

³ 高等学校の場合も「1単位時数」の内訳(50分間×35回)は中学校と同じ。ただし、高等学校は全日制/定時制の別、学校種(普通科・工業科・商業科等)と類型(文系・理系)によって英語の履修単位数が異なるので、一律には計算できない。本書で用いた「約510時間」は、筆者が数校の全日制普通科文系に問い合わせて得た回答の中間値(550授業時間数)を採って、それを実際の時間の長さすなわち60分に換算したものである。

執筆者一覧

| | | |
|--------|-----------------------------|------------------------------|
| 三浦 孝 | 静岡大学名誉教授 | 1章1節・1章6節・1章7節・ 2章2節・3章1節 |
| 加賀田 哲也 | 大阪教育大学教授 | 2章3節・4章1節 |
| 柳田 綾 | 桜花学園大学准教授 | 1章3節・2章5節 |
| 五十嵐 光緒 | 富山県立富山南高等学校教諭 | 4章12節 |
| 伊佐地 恒久 | 岐阜聖徳学園大学教授 | 4章15節 |
| 石井 博之 | 茨城県立水戸第二高等学校教諭 | 1章5節・2章9節・3章7節・ 4章9節 |
| 稲葉 英彦 | 静岡大学准教授 | 3章6節・4章3節・4章6節 |
| 今井 理恵 | 新潟医療福祉大学助教 | 4章13節 |
| 大脇 裕也 | 大東市立北条中学校教諭 | 3章4節 |
| 亀山 弘二郎 | 川崎市立高津中学校教諭 | 3章5節 |
| 北野 梓 | 大阪府立富田林中学校・ 高等学校教諭 | 4章2節・4章8節 |
| 桑村 テレサ | 京都先端科学大学教授 | 3章9節 |
| 椎原 美幸 | 長崎県五島市教育委員会指導主事 | 2章7節 |
| 柴田 直哉 | 名古屋外国語大学専任講師 | 3章2節・4章14節 |
| 清水 真弓 | 日本大学非常勤講師 | 4章18節 |
| 鈴木 章能 | 長崎大学教授 | 1章6節・2章1節 |
| 鈴木 成美 | 伊豆市立中学校教諭 | 4章4節 |
| 関 静乃 | 静岡大学非常勤講師、 ニューヨークアカデミー主宰 | 4章17節・4章19節 |
| 竹内 愛子 | 名古屋市立緑高等学校教諭 | 1章4節 |
| 永倉 由里 | 常葉大学名誉教授 | 2章4節 |
| 中田 未来 | 大阪教育大学附属池田中学校教諭 | 3章3節・4章5節・4章7節 |
| 中村 義実 | 新潟県立看護大学教授 | 3章8節 |
| 牧野 尚史 | 滋賀大学教育学部附属中学校教諭 | 2章6節 |
| 水野 邦太郎 | 神戸女子大学教授 | 1章2節・4章16節 |
| 溝口 夏歩 | 名古屋外国語大学専任講師 | 2章8節 |
| 峯島 道夫 | 新潟県立大学教授 | 2章11節 |
| 森田 琢也 | 大阪教育大学附属高等学校 池田校舎教諭 | 4章11節 |
| 山本 孝次 | 愛知県立刈谷北高等学校教諭 | 2章10節・4章10節 |
| 池ノ谷 叙威 | 静岡大学教育学部附属静岡中学校 卒業生 | コラム |

1 節

授業崩壊のどん底で見つけた、語りかける授業

三浦 孝

これは今から40年以上も前、私が若手教員だった時の話です。半世紀近くも昔の出来事ですが、私の教師人生にとって大きな転換点となった出来事です。もしもこれがなかったら、私は今のように英語教育を愛することもなく、研究者としての道もなかったことでしょう。

1. 指導困難校への転勤

大学を卒業し高校英語教員になって9年が過ぎようとする3月のことでした。普通科のG高校に赴任して3年目で、2年生を担当し、学級経営も教科指導もうまくゆき、翌年は3年生担任に持ち上がろうと意欲に燃えていた矢先に、県内で誰もが知る指導困難校への転勤を命ぜられました。まさに晴天の霹靂でした。

担任していた生徒たちと泣く泣く別れ、私は転勤先のT工業高校へと向かいました。その学校の荒れ様は聞きしに勝るものでした。

- ◇ 素行の悪さ（盗み・器物破損・無断借用）
- ◇ 怠惰（清掃さぼり・無断欠席・遅刻・早退）
- ◇ 生徒同士の関係の悪さ（けんか・いじめ・相互不信・弱肉強食）
- ◇ 授業モラルの欠如（私語・居眠り・暴言・立ち歩き・カンニング）
- ◇ 教師への不信

こうしたことが日常茶飯事で、学校は殺伐としていました。

授業とはいえば、始業のチャイムが鳴っても教室に入らず、前時の授業の板書は消してなく、定められた座席を無視して好きな者同士が集まって大声で私語を交わし、ある者は机に伏して眠り、小テストでは集団で一斉にカンニングをし、注意すれば「なんで俺だけ注意するんだ、あいつだってそいつだってやってるじゃねえか」と食ってかかります。担任としても英語教師としても、自分が機能していないことが明白でした。生徒には「ウッセー引っ込んでろ！」とののしられ、同僚には「三浦さん舐められてるぞ」と責められ、自尊心ボロボロの惨憺たる不安の日々。「自分はそのうち、内臓をやられるか、精神をやられるか、どちらかだろう」とさ

え思っていました。

2. 英語の猛特訓

前任のG高校の離任式に、2人の英語教師が登壇して挨拶をしました。一人は私、もう一人はD先生でした。D先生は私と同年齢で、かねてから「俺はこんなランクの低い生徒を教えたくはない。地域の有力者に頼んで名門のH高校へ転勤させてもらうんだ」と口癖のように言っていました。おそらく偶然の一致でしょうが、彼はその春H高校へ転勤になりました。

D先生の転勤が、私の闘争心に火を点けました。D先生が英検1級を何回も受験していることを知っていた私は、彼に負けまいと、いきなり1級合格を目指して猛勉強を始めました。毎日夜8時から12時まで4時間、必死に勉強しました。

一次試験準備から二次試験まで通算して5カ月、当時の私にとってこの勉強が無上の救いになりました。昼間の人生は、相手（生徒や教師たち）がいる世界であり、相手がこちらの言うことを聞いてくれないのでカラ回りし自尊心がズタズタになる世界でした。それとは対照的に、試験勉強の世界は自分が頑張りさえすれば確実に前に進むことのできる世界です。おまけに、資格試験は情実に頼らず、実力で勝ち取れる世界です。私は昼間の屈辱・無力感・怒りのどす黒いマグマを、夜の試験勉強にすべて注ぎ込み、馬車馬のようにものすごい勢いで前進しました。

猛勉強の甲斐あって英検1級に合格し、私はD教員に対する密かなりベンジを果たしました。それでも飽き足らず、それから通訳技能検定やTOEFL、科学技術翻訳士に挑戦し、同時通訳養成講座や日本語教師養成通信講座を修了しました。こうして約10年にわたって、英語を聞きまくり、読みまくり、書きまくり、話しまくったのです。意に反する転勤への憤りをすべて勉強に注ぎこんで、難関と言われる資格を取りまくりました。目標を達成し終えた時には、恨んでいた人たちに感謝さえしたい気持ちになりました。学ぶことは自分を支え、自分を変えろということを経験した時です。そしてこの時期の英語猛特訓が、後になって自作教材の開発や海外大学院受講の素地となって生きてくるのでした。

3. 授業の荒れを力で抑えつけようとした日々

私が赴任したそのT工業高校では、英語が生徒の最も嫌いな科目でした。入学時の英語の内申書成績は5段階評価で、高いクラスで平均3.5、低いクラスでは2.0でした。生徒の進路希望は、大学進学が約12%、他は就職か専門学校進学でした。

赴任してからの3年間、私は無理矢理にでも授業を聞かせようと、英語を叩き込む強圧的な指導を行いました。授業の最後の10分間を小テストに当て、その日の

授業を聞いていないと点が取れないようにしました。赤点者は放課後に集めて補講を行い、反復練習的なドリルで合格点を取ることを要求しました。毎時間、教科書を持参しているか、ノートを取っているかをチェックして平常点に反映させました。どれもこれも、生徒の力を伸ばすというよりも、荒れた学校で自分の授業を成立させるためでした。

工業高校のカリキュラムでは、英語授業が学業に占める割合は小さいものです。しかも英語は生徒の嫌いで苦手な科目です。そんな生徒を相手に、私は自分が受けてきた旧来通りの訳読と文法説明・ドリル式の授業を行い、赤点で追いまわったので、生徒の顔は苦痛にゆがんでいました。振り返れば、この時の私の授業は、学ぶ喜びどころか奴隷的強制労働でした。

そんなふうにして3年後に卒業生を見送ったあと、猛烈な寂しさと空しさに襲われました。自分は言葉の教師であり、言葉は人と人をつなぐものはずなのに、授業を重ねるたびに生徒と距離が離れていく。その孤独に耐えられなくなったのです。もう、自分が受けてきた授業スタイルでは立ちゆかないことを認めざるをえませんでした。さりとて、代わりにどういう授業方式を採ったら良いか、全く見当が付きません。

4. 旧来の授業に決別

最後の頼みに、「本当に生徒に語りたいことを英語で語ろう。生徒が何を考え、何を求めているかを英語で聞こう」と考えました。日頃から、生徒に語りかけ、聞いてみたい事柄が心に貯まっていました。それを英語の教材にして、授業をやらうとしたのです。もちろんこれは、英語の文法や語法・語彙を教える上では、偏りが生じるという問題があります。しかし当時の状況では、たとえ検定教科書で満遍なく教えたとしても、大半の生徒は聞いていないのだから、結果的には同じだと考えて、3年生の選択英語（週2回）の授業で翌年4月に実行に移しました。

最初に行った、'Bullying'の授業での真新しい感激は今も忘れません。最初に、イソップ物語の *The Boys and the Frogs* が平易に *retold* された物語で、内容理解活動・音読・文法解説を行い、物語の最後のカエルの長老の叫び、“*What is play to you is death to us all.*”（あなたがたにとって遊びであることが、私たちにとっては死を意味するのだ）の重さを強調しました。次いで、前年に東京で起こった集団いじめによる自殺事件の被害者の中学生が父親に書き残した遺書の内容を150語程度の英文に訳し、先のイソップ物語と同様の手順で教えました。それから下記のような選択肢を示して、もし同様の集団いじめを受けた場合、自分ならどうするかについて、生徒の考えを問いました：

- (1) I will fight back even if I am lynched.
- (2) I will join the bully's group.
- (3) I will put up with the bullying.
- (4) I will get better grades. Then they will stop bullying me.
- (5) I will ask the police for help.
- (6) I will ask my parents for help.
- (7) I will change school.
- (8) I will kill myself.

この選択肢の本当のねらいは、たとえどんなに困っても自殺する以外に取りうる方法があることを生徒に示すことでした。

それから、下記のような選択肢を見せて、“Have you ever witnessed a case of bullying like these?”と尋ねました：

1. They tell someone to die.
2. They always neglect someone.
3. They say that someone smells bad.
4. They call someone ‘the god of death’.
5. They always laugh at someone’s looks.
6. They tear someone’s clothes
7. They hide someone’s textbooks.
8. They beat someone for fun.

この選択肢の本当のねらいは、こうした行為が特定の個人に集中的に加えられると集団いじめとなることをわからせることでした。どちらも、選択肢から選ぶことによって、英語が苦手な生徒でも自分を表現できるように工夫しておきました。選択肢を教師が順次読み上げて、生徒が小さく挙手して答える方式で考えを聞きました。生徒は以前の授業時とは違って変わった真剣さで参加していました。寝ている者など一人もおらず、「目が据わっている」というか、まさに授業に食らい付いていました。

実はこのクラスにも、素行の悪い生徒や横暴な生徒が何人かいました。始める前、私は彼らの中の何人かがこの教材に反応して食ってかかってくるかもしれないと思っていました。それを覚悟で、薄氷を踏む思いで、しかし断固としてこのテーマを取り上げたのです。自分の人間性の根幹から、真剣に全力で生徒に語りかけた最初の授業でした。そして生徒の表情から、この授業がしっかりと受けとめられたことを私は感じました。

この成功に発奮して、この方式で‘Girlfriends’, ‘My Favorite Singers’, ‘My Future Jobs’, ‘My Favorite Comic Books’, ‘My Favorite Sports’, ‘My Favorite Tourist Spots’, ‘Friendship’, ‘Social Justice’などのテーマで教材を作ってみました。パソコンもプリンターもない時代で、毎夜3時間以上をかけて教材をタイプライターと手書きで作成しました。生徒が喜んで参加する姿を想像しながら作るのは、楽しくてたまりません。授業へ行くのも楽しみでした。

5. 一生をかけるに値する英語授業へ

この授業では、成功も失敗も全部自分の責任でした。それが、以前の授業との決定的な違いです。自分の信念に基づいて、自分の知恵をしぼって準備し、実施し、その成果が歴然とわかるのです。それまでの私は、授業がうまくゆかないのを、「学習指導要領が悪い」「検定教科書が悪い」「校長が悪い」「生徒が悪い」などと外的要因のせいにし、「自分が悪い」と思ったことはありませんでした。あのままいってれば、私は他人を批判するだけで自分からは何も創造できない愚痴屋で終わっていたでしょう。ところがあの日から私は、愚痴屋ではなく創造者になったのです。たった一人でも、現状を越えてゆくパイオニアになれたのです。

この授業のもう一つの収穫は、教師が生徒から学ぶ姿勢ができたことです。たとえば‘My Favorite Singers’の授業では、生徒から Billy Joel とか Rod Stewart とか、聞いたこともない歌手の名前を教えられました。そこでレコードレンタル屋に行ってレコードを借りて聴いてみると、中にはとても美しい曲が入っており、それを「今月の歌」として生徒と一緒に歌ったりしました。また‘My Favorite Comics’では、『タッチ』というマンガの存在を生徒に教えられ、本屋で買って私も好きになりました。‘My Summer Plan’では、1人の生徒が夏休みに豊橋から九州まで往復の単独自転車旅行を計画していることを知り感激しました。「義憤を感じた事件」では、私の教材に触発されて、3年生の生徒が就職試験で東京に行った時、老婦人が駅構内で転倒しているのに誰も助け起こさないのを見て、思い切って介抱してあげた話を聞きました。

このようにして、授業を行うごとに生徒のことが理解できるようになっていきました。そして私が聞く耳を持っていると感じた生徒たちは、心を開いてくるのでした。特にむずかしい理屈があるわけではなく、「生徒たちは何を知っているだろうか?」「このことをどう考えるだろうか?」「何が好きだろうか?」と聴こうとする姿勢を持っただけです。

このようにして授業改革1年目を終え、作成した教材約30本のうち、成功したものの3分の2を残し、あとは廃棄して新しく教材を作り直しました。その蓄積で3年後には、学校の印刷機で印刷した一年分の教材を印刷所に持ち込んで冊子に製本し

てもらい、『アクティブ英語コミュニケーション』という自主教材にし、それを使って授業を行いました。

授業改革前には重荷だった授業は、今や楽しくワクワクする発見の喜びに変わりました。生徒にとって奴隷的苦役のようだった授業は、英語による交流の場へと変わりました。教えるごとに生徒と私の距離が縮まってゆき、私は日々精神的にも若くなっていきました。

今から考えると私はT工業高校へ着任して最初の数年間、心の中で生徒たちを見下していました——ただ英語や国語といった学校の教科成績が低いというだけで。しかし、あの授業改革で生徒に耳を傾けるようになってからは、どの生徒もみずみずしい感性にあふれ、私にはない尊敬すべき一面を持っていることがわかってきました。まるで教室にこんこんと湧き出る泉を発見したように、その授業改革は私の教育観を転換させました。40人の生徒がいる学級には、40の泉が湧いています。それを掘り当てられれば、授業はこの上ない喜びに満ちていたのです。

もちろん私は自分だけの力で、その転換を切り開いたわけではありません。それは、私の試行的な授業を暖かい目で応援してくださった先生方と、授業に参加し協力し感想を述べてくれた生徒たちのおかげです。そのおかげで私は77歳になる今日まで、英語教育を自分の天職・生きがいとして愛し、毎日を過ごしています。その原点となったT工業高校は、私にとってまさに恩人だったと、つくづく思うのです。

9 節

自分が親になったら我が子に 言ってあげたい言葉

—自己表現活動を通じて生徒の自己内省を促す授業

石井 博之

1. 英語の授業で人間形成を促すために

高等学校の英語の授業を通じて生徒の人間形成を促す方法は様々考えられます。そのうち筆者がよく用いるのは、以下の手法です。

- (1) 生徒に思考するに値する問いを投げかける。
- (2) その問いに答える形で、英文で自己表現させる。
- (3) 表現内容を生徒間で共有させる。

自己表現活動を成功させる鍵は、(1) で生徒に投げかける「思考するに値する問い」にあります。この問いが、生徒にとって考える必然性のないものだったり、深く考えなくても答えられたりするようなものであれば、生徒の思考は深まりません。(2) の表現内容を思考する過程では自己内省を促し、(3) の共有を通じ、他者の考えを知ること、更なる自己内省をするように促す、というのが一連の流れのねらいです。高校生の時点で、自分自身を、ましてや他者を深く理解できている生徒はそう多くはないでしょう。英語活用の過程で、自己理解と他者理解を深めることで、自分自身と他者、そしてその意見や考えを大切にできる生徒を育てたい、という思いが筆者の活動の根底にあります。

本節では、2章9節「学習者の成長を促す自己表現」で、私が「問いを普通の授業に落とし込む3つの切り口」の一つとして挙げた、「②教科書の文法事項」を核とした問いに答える活動実践の具体を紹介します。

想定する学年は高校1年生で、助動詞を扱う単元です。科目は、「英語コミュニケーションⅠ」でも「論理・表現Ⅰ」でも構いません。中学校までの学習内容だと、例えば助動詞 **can** であれば、その意味は「～できる、～してもいい、～してもらえますか」あたりですが、高校生ともなると **can** 一つに対しても、場面に応じてそれ以上の種類の意味があることを学びます。これらを学習後、「自分が親になったら我が子に言ってあげたい言葉は何か」を問いとして、生徒に助動詞を活用した自己表現活動に取り組みさせます。具体的な実践を説明する前に、まずは筆者がこの実践

の着想を得るきっかけとなった先行事例を紹介させていただきます。

2. きっかけとなった先行事例

個人的な印象ですが、中学校の英語の先生方は、例えば生徒に習熟させたい新出の文法事項があるとき、それを活用する必要がある状況を無理なく設定し、生徒が興味を持って取り組める活動を設計することに非常に長けておられます。筆者はアイデアを得るために時折書店や古本屋などで中学校英語教育に関する書籍を探して読むようにしていますが、本事例はそうしているうちに出会った活動です。

立川（1991）は中学生への命令文の指導方法として、次の活動を紹介しています。

まず、生徒に「お家の人が口癖のようにあなたに言う言葉を書いてください」とアンケートを取ります。ここであえて「命令する言葉を書きなさい」とは聞きません。家の人の言葉にどれくらい命令文があるか感じさせるため、というねらいがあるからです。続いて、その結果を生徒に提示します。アンケートでは、なんと1～5位まで、かつ全体の7割弱が命令文で占められていたそうです。具体的には、以下のような内容です。

- 1位 Study hard. 「勉強しなさい」
- 2位 Bring your lunch box. 「お弁当箱早く出しなさい」
- 3位 Get up early. 「早く起きなさい」
- 4位 Don't forget anything. 「忘れ物をするな」
- 5位 Go to bed early. 「早く寝なさい」

これをもって、子どもたちの身近でいかに命令文が使われているか、それが使われる場面はどのようなものか、具体的なイメージを伴って実感させられる、という素敵なアプローチです。

この活動を読んだとき、「なんてすばらしい導入方法だろう。自分もこのように教わってみたかった」と思うと同時に、自分だったらこの後、続けて生徒に「じゃあ、自分が中学生の子どもの親だったら、我が子に命令文を使ってなんて言うかな？」と尋ねるかもしれない、とも思いました。こうすると、「命令ばかりされてやんなっちゃうよね」で終わらずに済みます。大事な我が子に命令する内容、理由を考えたとき、親の口から発せられる言葉のほとんどが我が子のためを思って生まれたものであることを実感できるはずだからです。

そこまで考えて、これは同様の内容を様々な助動詞を活用して取り組ませることができると気づきました。こうして生まれたのが、次にその具体的実践方法となる活動、「自分が親になったら我が子に言ってあげたい言葉」です。

3. 活動方法

活動を行うタイミングとしては、高校で学ぶ助動詞の解説や演習が終わった後に、仕上げとして活用することを想定しています。

まず、導入として、家に帰ってから親から言われるお小言を思い起こさせます。生徒に「おかえりなさい」以外で、家に帰るとすぐに親に言われる言葉としてどんなものがあるか問いかけ、「早く着替えなさい」「お弁当箱流しに出しておかなきゃダメでしょ」「もうすぐテストなんだから勉強しないと」「さ、早くお風呂入っちゃいなさい」「明日も朝練でしょ、もう部屋行って寝なさい」等々の表現を引き出します。

次に、これらを、命令文を使わずに英文にしようとする、授業で習った様々な助動詞やそれに関連する表現が大活躍することに気づかせます。上記の例なら、**must, have to, should, ought to, had better** あたりが使えるでしょう。

「いつも色々言われて、うるさいなあ、と思っているかもしれないけれど、自分が親だったらどんなことを自分の言葉で伝えるだろう。今回は親の目線を体験してみよう」と投げかけ、自分が親になったとして、子ども（性別、人数、年齢は自由）に何を言ってあげたいかを考え、理由と共に表現するよう伝えます。ここでは、高校生になって習った、多様な助動詞の意味を最大限活用し、言いたいことを英文にするように促します。

また、これだけだと小言しか出てこない恐れがあるので、例として以下のような英文を紹介します。私が以前同じ活動を行った際に生徒が残してくれた作品です。英文の次にあるのは、生徒が補足として書いてくれたコメントです。これがあるだけで、短い英語の一文の背景がわかり、その深みが増すので、筆者は生徒が英文で自己表現する際には、英語か日本語で必ず一言付け加えるように奨励しています。

You don't have to be a good girl, and you can say something selfish.

私は3人姉妹の長女だから、いつも我慢してました。そしたら、お父さんが「いつもいい子でなくていい。わがまま言っていていいんだよ」と言ってくれて、すごく嬉しかった。だから、自分の子にもそう言ってあげたいです。

こうすると、小言ばかりでなく、子どもへの思いやりあふれるメッセージも作れるように、思考の幅を広げることができます。

生徒の作品が完成したら、教えているクラスの状況に応じて、その場で即座に見せ合ったり、机上に置いたものを自由に歩いて見合ったり、あるいはいったん教師が回収して内容確認したうえで、口頭か英語通信などで紹介することで、他の生徒がどのようなことを考え、表現したのか考えさせる機会を設けます。